「授業備品」N039 H.29.5.22「研究の２層構造（専門性を高める２層構造）」

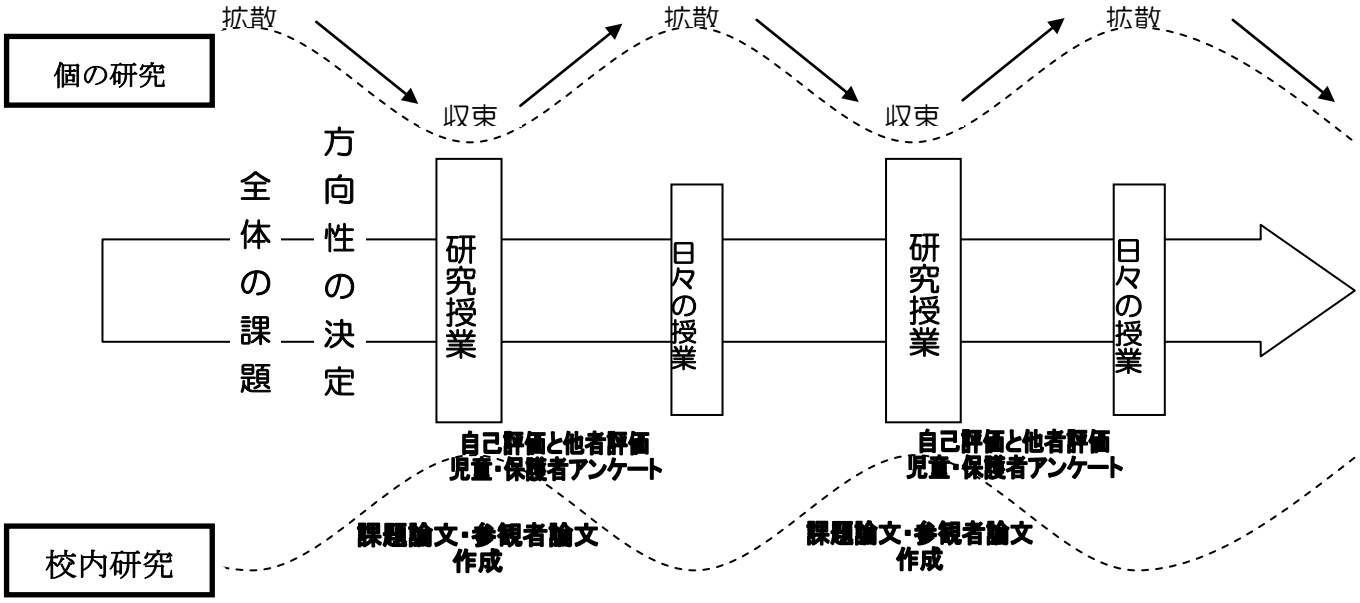
１　教科担任制のメリット・デメリット

次期学習指導要領の「主体的・協働的で深い学び」の授業の実施が迫ってきた。用意は出来ているだろうか。

私自身、教科担任制の学校を経験している。小学校の学級担任制は、「学級王国」を形成しやすい一面がある。だが、教科担任制は、教師が専門的立場から高い問題意識を持つことが出来る。また、教科担任教師の個々の生徒観察によって、子供理解をすることが出来る。さらに、専門教科を指導することにより、指導系列を的確に押さえた適切な指導も出来る。繰り返し同じ内容を指導することが出来るので、比較研究がしやすい。

しかし、課題もある。教科の専門性や独自性が尊重されるあまり、教科相互間の連絡・調整がつきにくい環境が出来やすい。教科の枠を越えた指導内容や指導方法について話し合うことが出来にくくなるからだ。教師の専門意識があまりにも強いと、専門教科に閉じこもったり、教科の枠を越えた共同研究が難しくなる。特に小規模校では各教科の担任教師が一人の学校もあり、切磋琢磨することが難しくなる。本人の自己研修に頼らざるを得ない状態も生じる。専門外に対しては「専門外だから感知しない」という教師文化や風土も生まれやすい。

２　研究の二構造



生徒指導や学級経営がうまくいかなければ授業は成立しない。だが、こうしたことは学校や学年単位での協働・協力によってある程度はカバー出来る。だが、「自分の授業を創る」ための力量は、最後は本人にしか出来ない。努力すれば授業力が高まるし、そうでなければ初任者のときにありがちな「教え込みの授業状態」がいつまでも続く。やがて、授業改革に消極的になる。

「研究」と「修養」は、教師に厳しく義務付けられている。医師をはじめ研究者と同じように生涯、研究を続けるのが教師の責務だ。責務を果たすための研究が校内研修だ。その校内研修には、教育実践活動を対象にする「校内研究」と、それぞれの教科の「専門性」を高める「個の研究」という二つの側面がある。

上記の図は、校内研究と個の研究の一体化（教師力の向上を図る研究システム）の図である。一年間の授業研究の流れを示した図だ。校内研究は、「授業」で共同研究意識をつなげていくことが出来る。授業研究を年間を通して行えば、教師間の拡散しやすい意識を収束することが出来る。

「個の研究」は、絶え間なく個人の努力の中で進めるしかない。私自身は、東京都という一つの自治体だけのの研究ではなく、関東地方という単位で研究会に参加してきた。それが今に生きている。「県」レベルという一つ枠では、広い視野から物事を見ることが出来ないと判断したからだ。

３　小規模校における専門性の高め方

(1)教師数の少ない学校

全国では教師数の少ない学校が多い。そうした学校では、教科ではなく「学習」という視点で授業を観合って

いる。校内研修の主題や内容もおのずとそうした内容となる。次期学習指導要領が示す、「主体的・対話的で深い学び合い」「言語活動の充実」「思考力・判断力・表現力」「問題解決的なな学習」「見通し」「振り返り」「つけるべき力」等を研究課題とし、授業づくりを行うとよい。教師数が少ないので小中の異校種で授業の乗り入れの研究も行う方法もある。次期習指導要領で提言された学校間の「接続」がそれに当たる。高知県ではこの領域の研修を町や村ぐるみ単位で行う学校も出てきた。すでによい成果が出たと報告もある。

(2)「自己研修の進め」（個の研究）＊岩手県総合教育センター「教員のための自己研修の進め方」

校内研修だけでは、教師の専門性が向上しない場合がある。そこで個の研究として、一人一研究の方法がある。私が関わってきた岩手県では、「教員のための自己研修の進め方」を行っているので参考にして欲しい。それは、アクション・リサーチという方法だ。アクション・リサーチとは、何か特別なことを行うのではなく、日々の教育活動の中から、自己の課題を見つけ、解決のための手立てを考え、実行し、その結果を自分で振り返る研究だ。

①自己研修テーマの設定

教科の葛藤からテーマを設定し、洞察を深めていく。

②テーマの明確化

設定したテーマには、どのような原因や要因があるかを考える。

③情報収集・予備調査

数値に基づく研究がよい。経過や勘だけでは思いつきとなりやすいので数値やデータで研究を行う。

④方法や手立ての立案

テーマの明確化から始まり、どのような手立てを行うかを考える。

⑤ゴール像の設定

「〇〇が出来るようになる、事後テストで〇〇点がとれるようになる」等、具体的な形で設定する。

⑥計画立案

１単位時間や単元全体で完結させるかどうか等の研究の立案を行う。

⑦計画実施

立案したら管理職等が指導をする。

⑧結果の観察・分析

ゴール像へどれだけ近づくことが出来たかどうかを吟味する。

⑨振り返り

文章でまとめる。

⑩実践交流

レポートを元に教師間で交流をする。さらに新たな課題や問題点を見出していく。

P	自己研修テーマの設定 テーマの明確化 情報収集・予備調査 方法や手立ての立案 ゴール像の設定 計画立案
D	計画実施
C	結果の観察・分析 振り返り
A	実践交流

(3)論文作成

共同研究意識をもたせる手段として、論文作成も一つの方法だ。子供が毎時間、振り返りを書くように教師も論文を書くとよい。すでに高知県津野町や越知町ではその方法に取り組んでいる。いくつかの学校では、研究授業後に論文を提出する仕組みも出来上がっている。研究授業をこなすだけから、自らの授業を振り返ったり、他の教師の課題を学校全体で解決しようとする環境が出来つつある。

４　広い視野から

これまで専門の教師の必要性があると考え、町や市グループで「同じ教科」が集まり研究を行うことがあった。それで教科の質が向上すればいい。だがそれだけでは、結果が出ない時があったことを思い出そう。近隣の教科同人との研究だけでなく、地道にレポートを書く、全国の研究会、教育センターの講演会、異校種の研究会、「乗り入れ授業」、教科を統合した研究会等へ参加し、個人の力量を高めてるいくのが教科の専門性を高める早道だ。年１回は、全国の研究会に参加されることをお勧めする。